# 華東農村訪問調査報告(5)：2012年12月,江蘇省の農村


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 弁納, 才一<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/30420 |

# 華東農村訪問調査報告(5)

## ―― 2010年12月，江蘇省の農村 ――

弁　納　才　一

### はじめに

筆者は，これまですでに4回にわたって華東地域の農村を訪問し，また，予備的な聞き取り調査も行ってきた[1)]。一方，華中農村と華北農村を比較するために，山西大学中国社会史研究センターの全面的な協力を得て山西省農村においても聞き取り調査を行ってきており，とりわけ2009年12月からはやや本格的な調査を実施してきた[2)]。

今回(2010年12月)は，まず単独で無錫農村を訪問した後に山西省太原市で山西省農村調査隊と合流して山西省農村を訪問して調査を行った。すなわち，12月19日に小松空港から上海へ行き，翌20日に上海から無錫へ移動し，同日午後は小丁巷を訪問して話しを聞き，翌21日は馬鞍村を訪問して話しを聞いた。さらに，翌22日に上海へもどり，同日午後は地下鉄と電車を利用して上海市嘉定区の丁家村を参観した。そして，24日に上海から山西省太原へ移動し，山西大学中国社会史研究センターで山西省における農村調査に関する打合せを行った。そして，今回の山西省の農村における訪問調査報告は，別稿においてまとめることにしている[3)]。

以上のように，今回の華東地域の農村において聞き取り調査を実施することができたのは，主に時間的な制約によって江蘇省無錫の2つの農村のみとなってしまったが，興味深い話を聞くことができた上に，その成果も決して少なくなかった。これは，前回までの無錫農村への訪問と同様に，無錫市政府政治協商委員会研究室主任である湯可可氏の全面的な協力と支援の賜物である。

そこで，本稿では，今回，聞き取り調査を実施することができた江蘇省無錫の2つの農村(栄巷鎮小丁巷と胡埭鎮馬鞍村)における聞き取り内容を中心に整理し，最後に，短時間ながら参観した上海市嘉定区馬陸鎮石崗村丁家村の現況を紹介することにしたい。

なお，本稿では，煩雑さを避けるために，原則として常用漢字と算用数字を用いることにした。

## Ⅰ　江蘇省無錫市栄巷鎮小丁巷

12月20日は，湯可可氏に公用車(運転手付き)で14：00に筆者が宿泊する無錫市内のホテルまで迎えに来ていただいて栄巷鎮小丁巷の栄紀仁氏の新宅(写真1を参照)へ向かった。

小丁巷にはこれまで何度も訪問しており，栄紀仁・黄三度の両氏にもすでに何度か話しを聞いている(注1を参照)。ただし，今回は，丁炳生氏が体調がすぐれず，来ていなかった。また，今回も，当初は共通語で聞き取りが行われていたが，話しが進むうちに方言(無錫語)が多くなり，筆者には聞き取ることができなくなってしまった。

訪　問　日　時：2010年12月20日　14：45～17：00
訪　問　場　所：栄紀仁氏宅
聞き取り対象者：栄紀仁，黄三度(写真2を参照)
聞　　き　　手：湯可可，弁納才一

### 黄三度の個人史

・1928年(辰年)生まれで，82歳になった。
・原名は盛仁中で，栄巷鎮大渲史巷に生まれたが，小丁巷に住んでいた叔父(母親の弟)の黄小金には子供がいなかったので，黄小金の養子になって黄三度と改名した。「大舅舅」(母親の兄弟にあたるおじ？)は黄金龍だった。
・1942年秋(14～15歳？)から公益小学で6年間学び，卒業した後(20歳？)，

写真１．栄紀仁氏居住のマンション入口

写真２．栄紀仁(左側)，黄三度(右側)

上海へ働きに行った。

・解放時の1949年，上海から栄巷鎮に戻り，翌1950年には小丁巷の叔父(黄小金)の家に行った。

・解放前は農地を持たない雇農で，土地改革の時に母親と２人で合わせて1.6畝の土地を分配された。小丁巷では土地改革で１人当たり0.8畝の土地を分配された。小丁巷は土地が少ない小さな自然村だった。

**栄紀仁の個人史(補足)**

・1949年に入学した立新会計学校は栄巷鎮西街にあったが，その後，その学校の敷地は「軍区」として占有されていた。

・1954～58年に小学校の教師をやっていた頃は，毎週日曜日には村(小丁巷)に戻って農作業を手伝った。

**互助組**

・1952年，小丁巷では村全体で１つの互助組が組織され，「換工組」を組織していた丁仁泉・丁龍生・栄益根と「単干戸」(戸別の単独経営)の龐仁元・張月芳を除く，ほとんどの家が互助組に参加したが，1952年以前には小丁巷では「換工」は全く行われていなかった。

・解放前に佃農(小作農)だった麗仁元は，土地改革後に２畝の土地を分配され，「単干戸」としてニラを栽培して市場で売っていた。また，同じく「単干戸」だった張月芳は夫がもともとは「飯店」で働くなど，農業外収入のある「四属戸」だったが，土地改革で1.6畝の土地を分配された。

・小丁巷の互助組に参加したのは許錫倫・丁恵徳・丁金甫・潘吉娣(丁金甫の妻)・黄小金・沈洪媛(黄小金の妻)・黄三度・許保根・任杏娣・栄紀仁・栄阿夫の９戸11人で，互助組の組長には「管銭，記工」(労働点数の記録係を含む会計か？)を担当した許錫倫と「管農活，安排」(現場の農作業の指揮・管理)を担当した陸炳生が選出された。許錫倫は解放前には布の商売をしていたので経理関係の仕事が得意だったが，1938年に日本軍がやって来たので，商売ができなくなって本村に戻ってきた。

・1953年，小丁巷の互助組では約35元で「脱粒機(脚踏軋稲機)」(脱穀機)を購入した。この購入資金は，栄紀仁などが「営房」(「軍区」の「軍隊住房」)を造る仕事をして稼いだものだった。１日の作業につき1.26元の手当があった。

・小丁巷において脱穀の作業が終わると，脱穀機を近隣の鄭巷・栄巷・東横山まで持って行って脱穀の作業をやった。栄紀仁・栄阿夫・許保根・丁恵徳・黄三度のうち，３人が交替しながら脱穀の仕事をした。最も若かった栄紀仁は毎回必ず村外での脱穀の仕事に参加した。脱穀の手間賃は１人当たり１日２元で，持参した脱穀機１台の１日の使用料として５元を徴収した(１日当たり11元を稼いだことになる)。脱穀機は１日で３畝以上の土地から収穫することができる分量の稲を脱穀することができた。

初級合作社

・1955年12月，それぞれ小丁巷・許巷・鄭巷・東横山にあった計４つの互助組が統合されて初級社が組織された。その後(1956年３月)，すぐに高級社が成立したので，初級社には特に名前が付けられることもなく，社長も選出されなかった。

高級合作社

・1956年３月，聯合高級社が組織された。その後，人民公社が成立すると，聯合高級社は聯合大隊となり，かつての互助組は生産小隊となった。

人民公社

・人民公社には13の小隊があった。小丁巷と許巷が第１小隊，鄭巷が第２小隊，東横山が第３小隊，栄巷東浜が第４小隊，栄巷西浜が第５小隊，朱祥巷が第６小隊，楊木橋が第７小隊，大渲史巷が第８小隊と第９小隊，蚕桑隊が第10小隊，養殖を行う水産隊が第11小隊から第13小隊までとなっていた。

湯可可氏は公務のために翌21日の農村(胡埭鎮馬鞍村)への訪問に同伴することができないということだったので，上記の聞き取りが終わった後に，翌21日の馬鞍村への訪問に同伴していただくことになった周孜正氏(華東師範大学歴史系大学院博士課程の大学院生で，中国近現代史特に中華人民共和国初期の「工会」(労働組合)の研究を専門としていると同時に，無錫霊山実業有限責任公司で働いているという。)と３人で会食をして翌21日の農村訪問に関する打合せを行った。なお，この会食では酒類は全く出なかった。

そして，夕食後，周孜正氏に案内していただいて同氏の現住地である馬山鎮にある霊山大仏を見学した。大仏以外にも巨大かつ荘厳な建造物がライトアップされていた。巨大な大仏の周辺一帯が景勝地・観光地(無錫「霊山景区」?)として開発されているが，周孜正氏が勤務している無錫霊山実業有限責任公司と何らかの関連があるのだろうと思われる。

## II　江蘇省無錫市胡埭鎮馬鞍村

12月21日は周孜正氏が９：30頃に筆者が宿泊する無錫市内のホテルに迎えに来てくれる約束をしていたが，実際には９:15頃に自家用車(日本から輸入された日産自動車)でやって来て慌ただしく出発することになった。車で馬鞍村へ向かう途中の道路沿い(栄巷鎮の近辺か?)に栄宗敬の墓(無錫市人民政府によって1993年５月20日に無錫市文物保護単位に認定されている)があった(写真３・写真４を参照)。

訪　問　日　時：2010年12月21日　10：15～11：30・12：30～14：30
訪　問　場　所：無錫琳達織造有限公司会議室
聞き取り対象者：王望栄・王少生・呉文勉(写真５を参照)
聞　　き　　手：弁納才一・周孜正

## 王望栄の個人史

・1922年４月18日生まれで，89歳になった。
・1928年(７歳)，邵巷小学に入学し，貧しかったので，４年間しか学ぶことができなかったが(当時は，小学校６年のうち最初の４年間は「初小」

写真３．栄宗敬の墓地の入口

写真４．栄宗敬の墓

写真５．(左から)王望栄・王少生・呉文勉

(初級小学校)と呼ばれ，その後の2年間は「高小」(高級小学校)と呼ばれていた)，成績が優秀だったので飛び級して5年で卒業した。当時の学費は1年間で2元だった。

・1932年(11歳)，小学校を卒業し，農業をやった。主に水稲・小麦(冬麦)・山芋を栽培し，蔬菜や甘藷も少し植えた。山間部の土地を借りて開墾し，山芋と甘藷はそこで栽培したが，3年間は小作料を払わなくてよかった。米と小麦が主食で，小麦は少し余剰があったので，売った。また，3斤の甘藷は1斤の米と交換することができた。ただし，主要な収入源は養蚕だった。

・解放前は，水田が3.7畝あって，小作地が4畝あったが，農地は18ヵ所に分散していた(末尾の注4)に掲げた呉文勉氏著書104頁を参照)。その最大の理由は，本村には大地主がいなかったために(最大の地主でさえ，その所有地は30畝にすぎなかった)，複数の家から土地を借りたことにある。また，水利灌漑などの条件が良くない土地や遠く離れていて行くのに不便な場所にあった土地を貸すことが多かったからである。なお，小作料は「糙米」(玄米)で支払った。

・1935年(14歳)，母親が病死し，父親は精神病をわずらって働くことができなかったので，生活は苦しかった。3人の妹がいた。

・1941年(20歳)，陸秀珍(武進県雪堰橋村の出身)と結婚した。雪堰橋村は馬鞍村とは川を挟んで向かい側にある。

・1945年8月(24歳)，日本軍が撤退し，国民党政府が本村にも戻ってきて徴税を行った。徴税は1畝当たり2斗(30斤，現金で2元)で，抗日戦争時期の日本軍による徴収額と同じだった。当時，1畝当たり平均約340斤の収穫があったので，30斤は収穫量の8～9％にあたる。

・1950年(29歳)の土地改革では，水田2.5畝と山間部の土地(もともとは小作地として借りて開墾していたところ)10畝(稲作地の5畝にあたる)の計7.5畝の土地を分配された。

・1951年7月，馬鞍村の9戸の農家が本村で最初の互助組を組織した(詳細は呉文勉氏著書58頁を参照)。

王少生の個人史

・1933年8月11日生まれで，78歳になった。2人の兄がおり，3人兄弟である。

・1939年(7歳)，小学校に入学して6年間学んだ。1年生から4年生までの初級小学は邵巷で，5年生と6年生の高級小学は胡埭鎮で学んだ。胡埭小学校は自宅から3里余り離れていた。

・1945年(日本軍が撤退した直後か？)，小学校を卒業し，農業に従事した。我が家には土地はもともと約14畝あったが，両親と3人の兄弟で4等分に均等分割した(1人当たり約3.5畝)。私は両親と一緒に暮らしていたので，合わせて7畝の土地を耕作した。主に水稲・小麦・蔬菜などを栽培したが，山芋の栽培は少なく，養蚕もあまりやらなかった。一方，3匹の豚と3羽の鶏を飼育していたが，豚は3匹のうち，1匹を自分の家で食べ，2匹を売った。また，鶏は3羽のうち，1羽を自分の家で食べ，1羽を塩などの日用必需品と交換した。

・解放前は，収穫した米を売って塩や食用油などと交換した。

・1949年10月に解放軍が本村にやって来て，1950年に土地改革で我が家は「中農」に階級区分されたので，土地の分配はなく，所有地に変化はなかった。

・1951年には解放軍に入隊し，上海に駐屯していたので，不在中は父親が7畝の農地を耕作した。

・1956年，徐仁鳳(武進県雪堰橋村の出身)と結婚した。雪堰橋村は前掲の王望栄氏の妻である陸秀珍の出身地であり，馬鞍村とは比較的近いところにある。両村は，武進県と無錫県に分かれていたが，通婚圏内にあったと考えられる。

・1957年4月に「復員」(除隊)して馬鞍村に戻ってきて，高級合作社に参加して農業に従事した。

・1962～68年，荘橋頭小隊の小隊長をつとめた。

・1968～80年，胡埭採鉱廠の工場長をつとめ，1980年(58歳？)に停年退職し，現在に至っている。

地主の薛家と資本家の栄家

・義庄には栄家の小作地が多くあった。貧農はわずかな土地を手放さざる

をえなくなった時，地主の薛家(永泰絲廠を経営か？)あるいは資本家の栄家に売ったが，その後，その土地で小作人となった。だが，小作料は薛家よりも栄家が少し少なかったので，土地を売ろうとする農民はどちらかと言えば，栄家に売ることを希望した。しかも，栄家は徴収した小作料を様々な慈善事業(「辦学，賑災，捐棺材」)のために使った(詳細は，周孜正氏が整理することになると思われる)。

「換工」

・解放前にも「換工」は行われていた。一般的に，「換工」をやった人数は互助組よりは少なかった。

抗日戦争時期の状況

・抗日戦争中，近くの閻江村は日本軍によって村ごと焼き尽くされたが，馬鞍村の経済には戦争による直接的な被害がなかったので抗日戦争以前と比べてそれほど大きな変化はなかった。ただし，日本軍が徴税(「田畝捐」)した上に，遊撃隊(地方軍であって共産党軍ではない)も「卡子」を設けて城内に売りに行く農産物に対して徴税したので，農民の負担は重かった。

・駐留していた日本軍が村民を徴発してトーチカを作らせた。

・1940年前後，馬鞍村には共産党の新四軍(共産党軍)と忠義救国軍(国民党軍)がいた。

土地改革

・1950年，土地改革が始まった。土地改革で貧農には1人当たり1.5畝の土地が分配された。

合作化と人民公社

・1954年冬，3つの互助組を統合して初級合作社が組織された(詳細は呉文勉氏著書58頁を参照)。

・1956年，21の小隊からなる馬鞍高級社が成立した。王望栄と王少生は荘橋頭小隊に参加し，呉文勉は前呉巷小隊に参加した。

・1958年，胡埭人民公社が成立した。

なお，馬鞍村の基本的な概況については，すでに呉文勉氏がその著書の中

でまとめており，参照するべき点が非常に多い。また，聞き取りにあたって無錫方言から共通語への通訳(時に筆談も交えながら)については，午前中は周孜正氏，午後は呉文勉氏に担当していただいた(写真６を参照)。

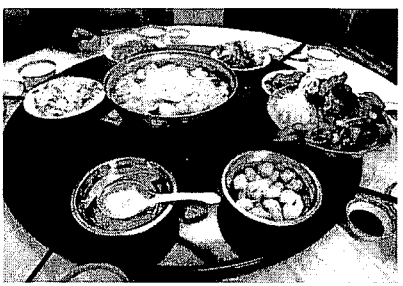
昼食は，同工場内の食堂でご馳走になった(写真７を参照)。最初，黄酒かビールを飲むかどうか話が出たが，周孜正氏が車を運転するので飲まないと言い，筆者も含めてその他の者も飲まなくてよいと言うと，酒は出されなかった。また，王少生氏以外はみな煙草を吸わないので，食事中は王少生氏も遠慮して煙草を吸わなかった。このように，山西省の農村における地方幹部との会食とは全く雰囲気が異なっていた。

最後に，呉文勉氏から「馬鞍村的明天更美好」(「呉文勉写于2010年国際労働節前夕」)と題する文書と中国社会科学院に宛てた手紙(まさに消えゆく馬鞍村の写真を添付した報告書，2010年４月10日付)を見せていただいた。たしかに，前回2008年に訪問した時は，同工場の周りには水田や畑が広がっていたが，今回は周りには全く農地が見えなくなっていた。工場用地になるのか，地ならしと幅の広い道路を作る工事が行われていた。

なお，今回，話を聞いた無錫琳達織造有限公司は2010年10月に出火してしまったという。たしかに，工場の一部に煤が残っていた。また，工場は来年には別の場所に建て直すという。ちなみに，現在，同工場で働いている一般の労働者の大部分は安徽省や四川省から来た高卒の若者だという。本村民は賃金などがもっと高い条件の良いところで働いている。

写真６．呉文勉氏より説明を受ける筆者

写真７．昼食の円卓



## Ⅲ　参観地の状況

上海市嘉定区馬陸鎮石崗村丁家村でもすでに家屋の取り壊しが行われていた(写真８・写真９を参照)。かつて話しを聞いた丁濤泉氏の家屋を含む数軒のみがわずかに残っていたが(写真９・写真10を参照)，そこへ近づいて屋内をのぞき込むと，丁濤泉氏の家族の姿は全く見当たらず，見知らぬ人間が数人いるだけだった。それらの家屋には家屋の取り壊し作業や地ならしをする作業員が寝泊まりしているのであろう。

こうして，ちょうど１年前に石崗村の龔氏一家との連絡が途絶えたのに続いて，丁家村の丁氏一家との連絡も途絶えてしまった。すでに村民が１人もいなくなり，農村は完全に消滅していた。

写真８．取り壊される丁家村の民家

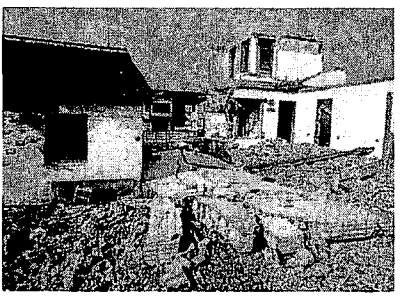
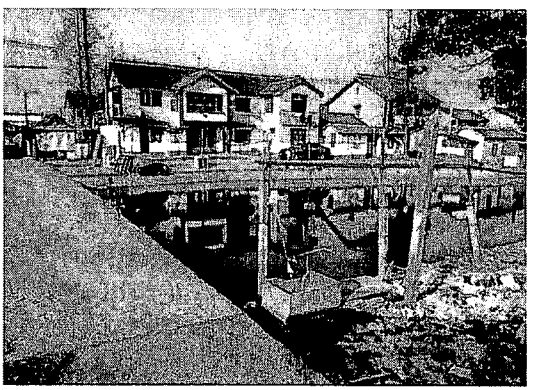


写真９．取り壊される丁家村の民家

写真10．丁濤泉氏宅（中央）



## おわりに

今回，無錫市栄巷鎮小丁巷で互助組に関する話しを聞くことによって，当時の同村内の人間関係や社会経済状況などが少し見えてきたような気がする。

今後の調査では，小丁巷については土地改革の個別具体的な状況をやや詳細に聞く必要がある。

一方，無錫市胡埭鎮馬鞍村の呉文勉氏は中国農村における知識人であり，そのような自負もあるということを今回も強く感じた。農村の過去を知る上で，このような人物の協力を得ることは極めて有益であり，かつ重要である。馬鞍村の概略は呉文勉氏の著書[4]によって知ることができるので，今後の聞き取り調査では個別の事情を聞く必要がある。とりわけ，今回は，老幹部の２人の個人史を少しだけ聞いたが，妻以外の家族のことはほとんど聞くことができなかった。これは，呉文勉氏の著書にも全く言及されていないので，今後の訪問調査では是非とも話しを聞く必要がある。

上海市嘉定区馬陸鎮石崗村や無錫の小丁巷に続いて，馬鞍村もまもなく農村そのものが消えようとしている。改めて，華東農村の変化の激しさに驚かされた。

注

1）拙稿「華東農村訪問調査報告(1)－2008年３月，江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第１号，2008年12月)・同「華東農村訪問調査報告(2)－2008年９月，江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第２号，2009年３月)・同「華東農村訪問調査報告(3)－2009年３月，江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第30巻第１号，2009年12月)・同「華東農村訪問調査報告(4)－2010年２月・３月，江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第31巻第１号，2010年12月)。

2）拙稿「華北農村訪問調査報告(1)－2007年12月，山西省太原市・霍州市農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第１号，2008年12月)・同「華北農村訪問調査報告(2)－2008年12月，山西省太原市・霍州市・平遥県農村」(北陸史学会『北陸史学』第57号，2010年７月)・同「華北農村訪問調査報告(3)－2009年12月，山西省P県の農村」(金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第42号，2011年２月)・同「華北農村訪問調査報告(4)－2010年８月，山西省P県の農村」(『金沢大学経済論集』第31巻第２号，2011年３月)。また，中国山西大学側の調査報告として，行龍・郝平・常兵・馬維強・李嘎

（弁納才一訳）「山西省農村調査報告(1)－2009年12月，P県の農村」（『日本海域研究』第42号，2011年２月）と行龍・郝平など（弁納才一訳）「華北農村調査報告(2)－2010年７月，P県の農村」（『金沢大学経済論集』第31巻第２号，2011年３月）がある。さらに，日本側の調査報告として，内山雅生・三谷孝・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(1)」（長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第11号，2010年12月）・田中比呂志「華北農村訪問調査報告(1)－2009年12月，山西省P県D村」（『東京学芸大学紀要（人文社会学系Ⅱ）』第62集，2011年１月）などがある。

3）拙稿「華北農村訪問調査報告(5)－2010年12月，山西省の農村」（『金沢大学経済論集』第32巻第１号，2011年12月）を参照されたい。

4）呉文勉・武力『馬鞍村的百年滄桑－中国村庄経済与社会変遷研究』（中国経済出版社，2006年）。